

この「広報ひこね」は48,300部作成し、1部当たりの単価は7円（1円未満切り捨て）です。ただし、原稿作成・編集などにかかる職員の人件費は含まれていません。

連載企画 「わたしの町の戦国」 第4回

江戸幕府砲術指南の本貫地―
田付城と田付氏

田付城は、田附町の北隣りに位置する三ッ谷町字増見の地一帯に存在したと伝えられています。豊田神社から南の埋葬地に向

かって伸びる道沿いであり、現在は整然とした水田に変わっていますが、明治時代初期の絵図を見ると、周囲の水田より一段高い畑地として描かれています。畑地の外周は水路が巡っていたようです。この地が、田付城の城館が存在した所と想定されます。



▶明治時代初期の絵図で確認できた田付城跡の位置

地元では、この場所一帯を「上屋敷」とも呼んでいたようであり、その一隅には稲荷山という丘があつて稲荷神社が祀られていました。かつては田付城の鎮守であつたのかもしれない。稲荷神社の御神体は、現在は豊田神社に合祀されています。そのほか、この場所の北には「裏の門」「上出口」「下出口」「堀ノ角」「上堀ノ角」など、城館に関係すると思われる地名が散見されます。

この田付城を築いたとされるのが田付小孫太宗重です。彼の先祖は淳和天皇の子守房親王と伝えられており、守房親王が田附町に所在する八幡神社（若宮八幡宮）の神官として当地に赴いたことに由来するといわれています。このことを記念する「守房親王之碑」が、田付城跡に隣接する埋葬地に昭和45年に建立されました。

宗重以降、代々が田付城主として近江源氏佐々木一族に従つたようですが、宗重より9代の重房のとき、文龜3年（1503）の春に軍律を犯したため、佐々木一族の六角氏綱によつて城と領地を没収され、蟄居を命ぜられます。ちなみに重房の子安重は、日野音羽城主蒲生賢秀に仕えました。

こうして主の居なくなつた田付城ですが、翌永正元年（1504）、六角氏綱は配下の伊庭景定の子景春に田付氏を継がせ、田付城主に任じました。以後、景澄、景輔と六角氏に仕えますが、景輔晩年の天正元年（1573）、織田信長の攻撃を受けて田付城は落城。城や近隣の武家屋敷、寺の建物はことごとく灰燼に帰したと伝えていきます。

景輔は落城とともにこの地を去つて伊勢に逃れたようですが、彼は六角氏の下で砲術を得意と

◀現在の田付城跡



し、一派をなして田付流を称していました。その秘術は子の景規に受け継がれ、望まれて福島正則に仕え、3千石を領して安芸国広島に移り住みました。福島氏の断絶後は江戸幕府に召され、幕府の砲術指南役として国内にその名を知られるようになりました。子孫もまた代々が砲術指南役を勤め、幕末にいたります。

問い合わせ先 両教育委員会文化財課 ☎26-58033番、FAX

26-58099番

